

矢追 愛弓

フェルナン・クノッフ作《愛撫》における夢と現実 —画中の銘文の解説より—

矢追愛弓氏の論文は、19世紀末ベルギー象徴派を代表する画家フェルナン・クノッフの作品《愛撫》（1896年、ベルギー王立美術館）を再検討し、画中に書き込まれた銘文を解説して新たな作品解釈をもたらそうとするものである。

スフィンクスとアンドロギュノスと目される二人が身体を寄せ合う場面を描いた《愛撫》は、これまでは19世紀末に一世を風靡したフランス象徴主義文学の作家、神秘思想家ジョゼファン・ペラダンのアンドロギュノス崇拝と関連づけて論じられることが多かった。ところが矢追氏は、解説不能とされていた謎めいた銘文に着目し、クノッフの他の作品の類似した銘文と比較検討しながら、クノッフ独特の省略的な字体の特徴を明らかにし、画中文字の説得性のある解説に成功したのである。と同時に、別作品《ヴェラーレンと共に—天使》（以下《天使》）の銘文も《愛撫》のそれと同一であることを見出し、さらには「私の夢はこの現実を修繕するだろう」というその一文が、ペラダンの小説『至高の悪徳』からのやや改変された引用であることも突き止めている。ある画家の代表作を研究して新知見をもたらすことがきわめて難しいことを考えると、これは真に独創的な目覚ましい成果というべきであろう。

銘文の解説を踏まえた後半部分では、クノッフが上記二作品より前にスフィンクス像を導入し、「宿命の女」による誘惑と墮落を提示した《ジョゼファン・ペラダンにならいて—至高の悪徳》からの展開を考察しながら、《愛撫》と《天使》の新たな作品解釈を試みている。

クノッフの関心は誘惑から次第に誘惑される者の内面へと向かっているのだが、《天使》においてヴェラーレンの詩「対話」やペラダンの『至高の悪徳』とも共通する獣性の制御、自己抑制への渴望が表されているのに対して、《愛撫》にはより複雑な要素と表現が看取される。ペラダンの戯曲『オイディプスとスフィンクス』との関連性については既に指摘されているが、矢追氏はモローの絵画《オイディプスとスフィンクス》を構図の参照源として挙げ、さらにバルザックの小説『砂漠の情熱』が《愛撫》の二人の人物像に与えた本質的な影響も指摘する。そのような複合的な引用関係の上に、快楽か権力かという欲望の選択を前にした人間を表す一種の寓意画として本作が描かれたと主張するのである。

その場合、「私の夢はこの現実を修繕するだろう」という銘文は何を示唆しているのか。欲望を前にして選択できない人間の「現実」を「夢」によって修繕すること、その対処の仕方として本作では「愛撫」という行為があり、バルザック的な危うい均衡状態が表されているのである。クノッフの創作行為に即していえば、「夢」によって修正された「現実」を形象化したものが絵画ということになる。概ね妥当な解釈と言えよう。

以上のように、本論文は《愛撫》の画中文字の解説とその文の出所の特定を行った点に、まず最大の功績を認めることができる。その上で、《愛撫》を中心に他の関連諸作品も含めて、クノッフにおけるスフィンクス像の変遷と位置づけを、同時代思想との関わりで解釈し直している点も高く評価される。論証の細部においてはやや曖昧さや議論の余地があり、今後深めるべき課題も残っているが、クノッフ研究を明確に前進させた意義はきわめて大きい。

以上の理由により、矢追愛弓氏に『美術史』論文賞を授与し、その功績を称える。